

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 7 月 1 日現在

機関番号：87115

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520130

研究課題名(和文) インド更紗の日本における受容の諸相と展開

研究課題名(英文) Various aspects of acceptance of Indian sarasa and its development in Japan

研究代表者

岩永 悦子 (Iwanaga, Etsuko)

福岡市美術館・その他部局等・その他

研究者番号：10590440

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、3種類のインド貿易布の呼称と日本に舶載された布との同定に成果を得た。サルピカードと呼ばれる布が更紗の一種と判明し、オランダが自国にインド更紗を輸入し始めた時期を、従来の想定より50年程早める結果となった。小堀遠州の周辺で、特注の更紗が制作されたことがわかり、遠州はインド更紗の茶道への導入のみならず、和更紗制作にも関与したと考えられる。また、江戸中期の更紗鑑賞熱の高まりには、円山応挙が関与した可能性があることが判明した。

研究成果の概要(英文)：In this research, the identification between the names of three types of Indian trade textiles and the ones that were shipped to Japan was achieved. The cloth called salpicado was confirmed to be one type of sarasa (chintz); therefore, as it resulted to move approximately 50 years back earlier than that of the assumed period in the past when the Netherlands started to import Indian sarasa to its own country. Besides, since the custom-made sarasa by a feudal lord Kobori Enshu as well as his circumference were found out, it could be considered to have been that Enshu not only introduced Indian sarasa to the way of tea but also took part in producing wa-sarasa, i.e. Japanese sarasa. Furthermore, the enthusiasm for sarasa heighten in the middle of the Edo period that could possibly be the result of a famous painter Maruyama Okyo associated with it was clarified.

研究分野：アジアの染織

キーワード：オランダ 国際研究者交流 イギリス 国際研究者交流 インド 国際研究者交流 更紗

1. 研究開始当初の背景

インド産の貿易布は、数千年にわたってインド洋世界で取引されてきた。16-17世紀以降の取引によってもたらされた貿易布のなかで、日本の文化・芸術に最大のインパクトを与えたのは、蠟による防染で文様を表し、媒染材を用いることで堅牢で鮮やかな発色を可能にした「更紗」であった。インドで作られた更紗は、鎖国政策が敷かれたのちにも日本国内で大きな流行が見られた。

日本でのインド更紗研究は、小笠原小枝が彦根更紗の紹介を行ったほか、包括的紹介を試みている。吉本忍は日本の裂帳などで見られる断片が、インドネシアの島々から完形で発見されることを示した。染織品を含む日蘭貿易については用語の分析も含め、山脇悌二郎、石田千尋により詳しくまとめられている。

しかしながら、インド更紗が日本で江戸時代に通して流行をみるに至る歴史的文化的背景については十分に語られてこなかった。また、文献を中心とする史的研究の成果と、現存する美術品の造形的分析を中心とする美術史的の成果が、互いに資する形で十分に活用されてきたとはいえない。

2. 研究の目的

本研究は、以下の3点を目的とする。

(1) 史的研究によって判明している成果と、美術史的研究で紹介されてきたインド更紗の遺品とを結びつける。

(2) 更紗が江戸初期から江戸時代末期まで、長く愛好されてきた、歴史的背景を探る。

(3) インド更紗が日本で受容されたのちに、どのように日本国内の美術工芸に影響を与えたかを検証する。

3. 研究の方法

(1) これまでに刊行されている英蘭の東インド会社のアジア貿易の記録を中心に、山脇、石田らの研究と照らして、そこに記載された更紗の貿易名と日本にもたらされたインド更紗との同定を試みる。

(2) 江戸初期から江戸後期にいたる更紗受容の隆盛を探るために、江戸初期の小堀遠州（政一、1579-1647）、江戸中期の木村兼葎堂（坪井屋吉右衛門、1736-1802）、江戸後期の松平不昧（治郷、1751-1818）周辺の3つの文化人ネットワークを中心に、その手がかりを求める。

(3) さらに、同時代の美術工芸や文化がインド更紗と呼応して発展した部分を精査する。特に日本の染織（和更紗、友禅、筒描）への影響関係を検証する。

4. 研究成果

(1) 17-18世紀の記録に残る貿易布の名称について

イギリス、オランダの両国が、東インド会社を設立したのは17世紀初頭である。日本にも商館が建設された。インド更紗は、その頃多く輸入された品物のひとつであり、現在も多種多様な更紗が日本に伝えられている。

日本に伝わる更紗には様々な文様が見られるが、当時の記録には文様の詳細が記されておらず、文様と貿易布の名称を結びつけることはできない。そこで、更紗のなかでも技法や素材に特徴があるものを選び、それらと貿易名に付されている特徴の記述などを照合し、同定できるものがないかを検討した結果、17-18世紀の貿易の記録に見られる布の名称「サルピカード」、「ギンガム」、「ササングentas」について、伝世品との同定に成果を得た。

・「サルピカード」は、1630年の平戸オランダ商館員の記録をはじめとしてしばしばオランダの記録に見られる。1650年のオランダ商館長の日記と『大猶院殿御実紀』巻七十七での同年の記録との比較により、日本では「霜降更紗」と呼ばれた更紗と判明した。さらに『増補華布便覧』（1781）には、霧を吹いたような地文様のある「霜フリサラサ」と銘打たれた挿図があり、彦根更紗にまったく

同手のものが含まれていることが確認できた。このことを「更紗の時代」展図録において発表したところ、オランダのインド更紗研究の第一人者であるエーベルチェ・ハートカンプ＝ヨンキス氏より、オランダ東インド総督アントニオ・ファン・ディーメンが 1631 年の書簡に、「サルピカード」を本国に送ったことを記しているとの御教示があった。このことにより、オランダがインド貿易布を自国用に輸入しはじめた時期を、定説より 50 年程早める結果となった。

・「ギングム」は、「ぎんがん（あるいは、ぎがん）嶋」と表記されており、現在「縞模様あるいは格子模様」と解されている。しかし、「サルピカード・ギングム」などのように、格子模様でない布にもギングムの呼称が用いられている。用語集「ホブソン＝ジョブソン」においては、ギングムの語源とされるタミル語の Kindan（キンダン）、カンナダ語の Ginta（ギンタ）、テルグ語の Gintena（ギンテナ）は、「二本引き揃えの糸で織られた布」を意味するとされる。このことから、17 世紀の貿易用語の第一義は「二本引き揃えの糸を用いた布」であると考えられる。彦根更紗には、格子模様と霜降文様の二本引き揃えの糸を用いた裂が含まれている。ギングムを「二本引き揃えの糸を用いた布」と定義し直し、様々な記録を読み直せば、新たな知見もたらされるだろう。

・「ササーグンタス」は、ローリンソン写本（オックスフォード大学ボドリアン図書館）の 1700 年 5 月 2 日付の文書に「織る前に糸を染める織物」として列挙されている貿易布の名称のひとつである。ササーグンタスは、なかでも、「1000 の結び目」という意味を持つ。この名称は、糸を何度もくくって色を染める緋の技法を想起させる。従って、日本という経緯緋の「格天井手」の更紗の可能性が高い。経緯緋の「格天井手」更紗は、日本とインドネシアのスラウェシ島のみから発見

される希少な更紗であるが、「ササーグンタス」であれば、貿易記録によればアフリカまで輸出されていたことになる。

(2) (3)

・小堀遠州

江戸時代初期に将軍家茶道指南となった小堀遠州は茶道具の次第（茶道具に添わせる、仕覆、箱、箱書、風呂敷など）を調えることに意を配ったことで知られ、更紗を茶道具の包裂に用い始めた。遠州が詠えさせたとされる茶道具の包裂は、18 世紀のヨーロッパの好みを取り入れた更紗は含まれていないことから、江戸時代初期に日本輸入された更紗の姿を端的にあらわしているといえる。

遠州が調製したとされるインド更紗の包裂は 10 数点知られているが、その中の染付面影」との名札が縫い付けられた包裂は、染色技術がインド更紗のものには及ばない、和更紗（日本製の更紗）であることが明らかである。そこに表されている丸紋には小堀家の家紋「七宝花菱」が含まれており、遠州が指示して制作させた可能性が高い。遠州の存命中とすれば 17 世紀前半であり、文献上の最も早い和更紗「紗羅染（シャムロゾメ）」の記述がある松江重頼撰『毛吹草』1645 年に匹敵する。京都における和更紗の誕生、あるいは隆盛の背後に、遠州の存在があった可能性がある。

・木村兼葭堂

18 世紀後半、安永年間から天明年間にかけて、インド更紗を中心として紹介する『佐羅沙便覧』（1778）、『増補華布便覧』（1781）などが相次いで出版されたことからわかるように、更紗愛好は新たな段階に入る。その時代の仕掛け人として、絵画関係、煎茶道関係、オランダ文化関係へと、さまざまな交友、文化活動の中心であった木村兼葭堂を想定してみた。しかし調査をすすめても、兼葭堂

と更紗を結ぶ手がかりは見出し得ず、今回の調査の範囲では、わずかに兼葭堂が『増補華布便覧』の初版本を所有していたことのみであった。

この時代に具体的に更紗との関わりを見出し得たのは、兼葭堂と交友のあった円山応挙である。今回の調査で、更紗を描いた紙片を貼り交ぜた屏風が2件発見された。それらは、円山応挙が眼にした更紗を描きとめておいたものを、応瑞、応震ら子孫が家宝として珍重していたという趣旨の文書を伴っていた。インド更紗が描かれ、出版されるということは、18世紀に、人々がインド更紗を「着る」「使う」時代から、「鑑賞」する時代へシフトしたことを物語っている。そして、そのシフトを象徴したのが円山応挙であったと考えられる。

・松平不昧

19世紀以降の江戸時代後半期には、輸入される更紗の量は、機械捺染でプリント布を生産できるようになったヨーロッパ産のプリント更紗が、インド更紗を凌駕していった。松平不昧の時代には17世紀に舶載されたインド更紗は小片でも貴重なものと考えられ、小片をつなぎあわせて用いられた。松平不昧周辺で調製された福岡市美術館所蔵《高麗雨漏茶碗》に付随する包裂のほか、旧長尾美術館所蔵の包裂（女子美術大学所蔵）にも、同工のパッチワークの包裂がみられる。

ただし17-18世紀に輸入された、いわゆる「古渡り」更紗の愛好は、抹茶道より煎茶道においての方が顕著である。その背景にあるものについては、調査がおよばなかった。

日本における更紗生産は、明治期以降に「和更紗」としてよりもヨーロッパの影響を受けたプリント更紗にシフトした。今回の研究を通して、1990年代までヨーロッパのプリント更紗の系譜に連なる、アフリカ向けのプ

リント更紗が、日本でも生産、輸出されていたことを知りえた。今後は明治以降の動向にも視野を広げて研究すべきであろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計1件)

岩永悦子、他、福岡市美術館、更紗の時代、2014、304

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩永悦子 (IWANAGA Etsuko)
福岡市美術館・学芸課・学芸課長

研究者番号：10590440

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：